

京機会関西支部第6回京都あそ歩 2024.04.20

京都向日丘陵の遺跡をあそ歩

===向日市周辺の遺跡を散策し、長岡天神でツツジを愛でてタケノコ会席===

【コース】 阪急東向日駅から西向日駅まで徒歩 5.3km

阪急東向日駅西口バス乗り場付近 (JR 向日町から 500m) →物集女車塚古墳 (後期前方後円墳) →南条古墳 (中期円墳) →伝高畠古墳 (前期円墳) →宝菩提院廃寺 →五塚原古墳 (前期前方後円墳) →元稲荷古墳 (前期前方後方墳) →長岡京大極殿跡 →長岡京朝堂院跡 →阪急西向日駅 (阪急乗車) →阪急長岡天神駅 → (徒歩 500m) →錦水亭 (長岡天神 八条が池 湖上の東屋 たけのこ会食)

向日丘陵の古墳と古代寺院

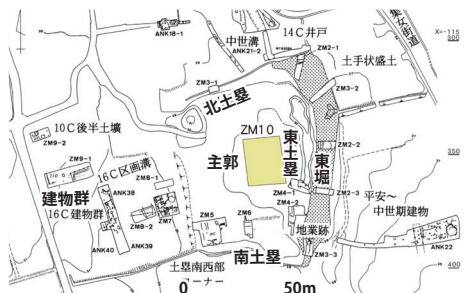
桂川西岸の古墳は前期 (3 世紀後半～ 4 世紀) から後期 (6 世紀) にかけて、檜原、向日丘陵、長岡・大山崎の 3 つの首長の系譜が考えられており、特徴的なのは、東国 (尾張、美濃) で多く見られる前方後方墳がそれぞれの系列の含まれることである。またそれぞれの系譜は最終的に仏教寺院に変化してゆく。前期古墳は山の尾根上に築かれることが多く、訪ねるのが難しいが、今回は比較的低い向日丘陵の、前期から後期の様々な形の古墳と古代寺院跡を訪ねる。

	葛野 (檜原)	向日丘陵	長岡	大山崎
前期	1 期		五塚原 元稲荷	
	2 期	一本松塚	寺戸大塚 北山	
	3 期	百々池	妙見山	長法寺南原 境野
	4 期	天皇の杜	伝高畠	今里車塚 鳥居前
中期	5 期	塚ノ本	牛廻り 加初 岳 2 今里庄ノ淵 恵解山	
	6 期			
	7 期	巡礼塚 山田桜谷	南条	
	8 期	穀塚 下山田下園尾		舞塚 塚本
後期	9 期	清水塚	物集女車塚	芝 井ノ内車塚 井ノ内稲荷塚
	10 期	天鼓の森 山田車塚		
終末期	檜原廃寺	宝菩提院廃寺	今里大塚 乙訓寺廃寺	山崎廃寺

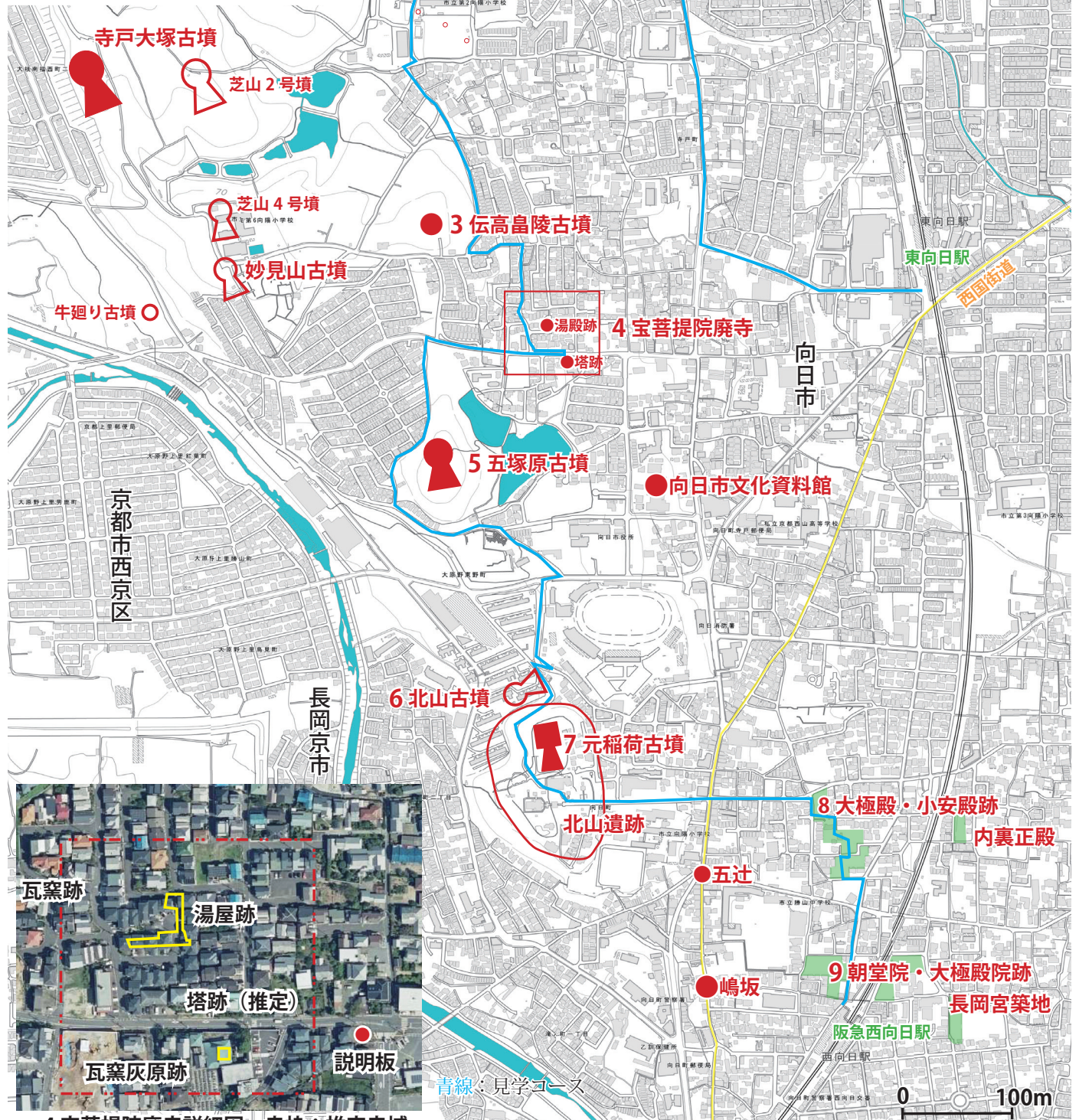
乙訓古墳編年表



葛野 (檜原)・向日丘陵の遺跡



物集女城跡：物集女氏は室町幕府の西郊被官衆三十六人衆の一人で秦氏の後裔を自称。物集女忠重が信長配下の細川藤孝に従わず、天正3年（1575）に勝龍寺城で謀殺され、居城物集女城は藤孝に攻められ落城した。



4 宝菩提院廃寺詳細図 赤枠：推定寺域

向日丘陵の遺跡（詳細図）



向日丘陵には古墳時代前期の前方後円（方）墳の築造系譜が認められ、元稲荷古墳、北山古墳、五塚原古墳、寺戸大塚古墳、妙見山古墳の5基が確認されている。南北二つの地域に分けて前3基と後2基のそれぞれの系譜がほぼ4世紀代を通じて築造され、その中で前方後方墳の元稲荷古墳が最初に築かれている。

やや時期は下がるが、南西に2km離れた長岡系譜も前方後方墳である長法寺南原古墳が最初に築かれている。また木津川右岸も前方後方墳から系譜が始まっている。

5世紀に入ると向日丘陵の前方後円（方）墳系譜は途絶え、円墳が築造されるようになる。かわって北方の檜原系譜（天皇ノ杜古墳）や長岡系譜（恵解山古墳）に移動する。

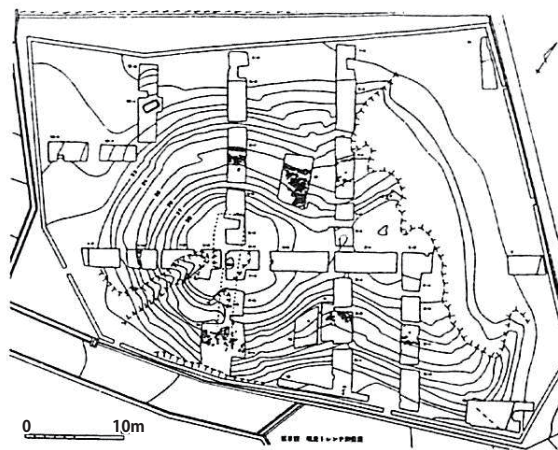
この時期は全長180mの大型前方後円墳である木津川市の久津川車塚古墳の出現と符合している。強大な首長と関係をもった新興の勢力の台頭と見ることもできるかも知れない。

1. 物集女車塚古墳

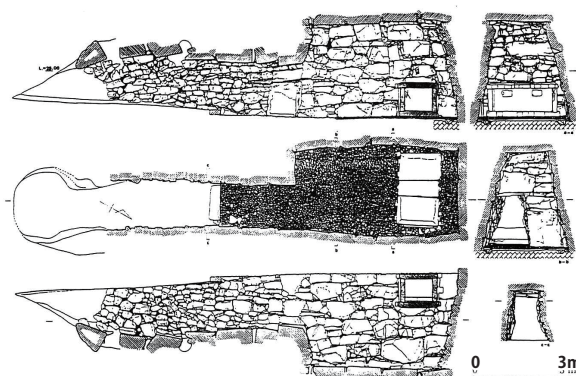
阪急東向日駅から北西方向へ向かうと、物集女街道の脇に物集女車塚古墳がある。横穴式石室を主体部に持つ後期古墳である。墳長約45mの前方後円墳で、前方部を北東の平野部側に向けている。後円部径約31m、高さ約6m、前方部幅約38m、高さ約7mで、前方部が発達した典型的な後期古墳といえる。2段集成で、一段目テラスと墳頂に埴輪列をめぐらし、上段には葺石が確認されている。横穴式石室は後円部側面の南東方向に開口し、左片袖式である。全長約11m、玄室長約5.1mで、排水溝を備える。奥壁にそって組合せ式の家形石棺が置かれており、同じ石材の石枕、用途不明石製品も伴う。副葬品は冠、環頭大刀、金銅装馬具など豪華なもので、6世紀中頃の首長墓と考えられている。



物集女車塚古墳墳丘 左が後円部 右が前方部



物集女車塚古墳墳丘図



物集女車塚古墳石室



物集女車塚古墳後円部



排水溝

2. 南条古墳

向日市立第2向陽小学校の西側にある、古墳時代中期（5世紀）の円墳。直径約23.5m、高さ約3.5mで、段築はなく、墳丘に葺石が施され、埴輪が並べられていた。埋葬施設は盗掘により破壊されているが、木棺を直接埋葬していたと考えられている。



南条古墳

3. 伝高島陵古墳

桓武天皇皇后（藤原乙牟漏）陵とされているが、径約65mの円墳で、前期末から中期の築造と考えられている。



伝高島陵古墳

4. 宝菩提院廃寺（長岡寺跡）

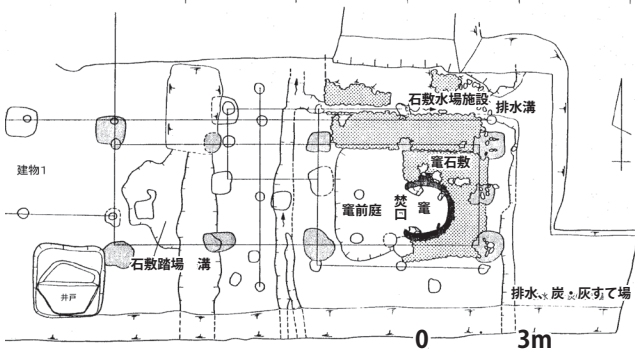
物集女車塚古墳の東を通る物集女街道を少し南下し、再び西へ折れる。この辺りは、寺戸町であるが、この地名の由来となったのが、宝菩提院廃寺である。7世紀後半の創建とされている。創建時の瓦は、単弁八葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦である。東西約2町、南北約1町半の寺域が想定されている。宝菩提院と呼ばれるようになったのは、鎌倉時代末期で、それ以前は願徳寺という名前であった。しかし、創建時の呼称は不明である。現在の慶昌院の前の道路の所で、かつて塔の礎石が掘り出されている。

2003年の調査で平安時代の願徳寺につくられた湯屋の遺構（石敷をそなえた大形の竈、石敷水場施設、石敷踏場をもつ溝、排水をかねた灰・炭の捨て場、覆屋）が見つかった。

向日グループとしてまとめられている多くの古墳の築造の次の段階にその地域で対応して創建されたと考えられている寺院である。



宝菩提院廃寺塔礎石出土地



宝菩提院廃寺湯屋遺構



勝持寺境内に再建された願徳寺

5. 五塚原古墳

五塚原古墳は主軸をほぼ南北に向けた全長 91.2 m、後円部径 54 m、同高 8.7 m、前方部長 40.5 m、同前面幅 33 m、前方部くびれ部付近から前方部頂の高さ 2.1 ~ 4.0 m、くびれ部幅 15 mの前方後円墳である。

ややバチ形にひろく前方部の形態から、古墳時代前期でも古く位置付けられてきた古墳である。

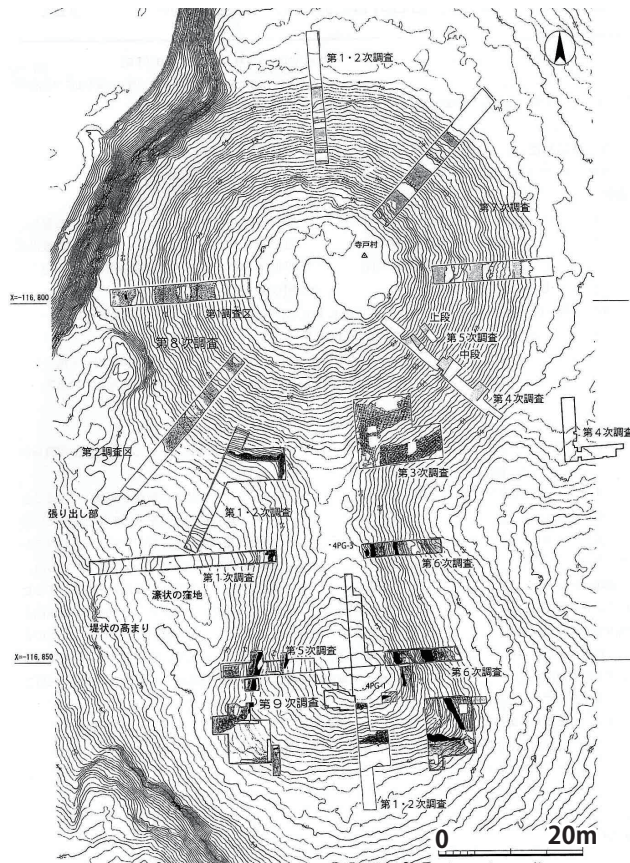
近年おこなわれた発掘調査では、墳形や規模等のデータが多く得られている。それによると、段築は後円部 3 段、前方部 2 段で、前方部に方形壇の存在が想定されている。各段の斜面には葺石をもち、テラスには礫を敷くが、埴輪はない。くびれ部が低く、幅が狭いのが特徴的であるが、前方部端の形状は確定していない。後円部頂には盗掘孔がある。探査の結果、盗掘坑または埋葬施設の墓壇と考えられる掘り込みが確認されているが、石材の反応はなく、埋葬施設が石材を用いないもの（粘土槨など）である可能性は高いだろう。いまのところ、古墳に直接伴う遺物は出土しておらず、築造時期の判断には決め手を欠いている。

五塚原古墳の墳丘の特徴は、前方部と後円部が分離した段築構造「斜路状平坦面」である。後円部の平坦面はほぼ水平にめぐっているが前方部とはつながっていない。このような墳丘の不整合は、奈良県桜井市箸墓古墳の特徴的な構造とみられ、全国で総数約 5200 基の前方後円（方）墳のなかで 2 例しか確認されていない。なお、前方部の平面形態は、纏向古墳群中の東田大塚古墳の復原輪郭線と近似していることが、平成 26 年（2014）の調査後の検討で明らかになった。

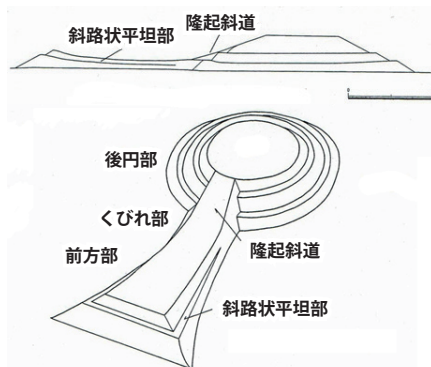
後円部はほぼ円形を描く段築構造であることがわかったが、箸墓古墳と同時期の古墳で後円部が精美的な円形に 3 段まで築かれた例は他に確認されていない。後円部 3 段、前方部 2 段の墳丘構造としては最も古い古墳のひとつとみられる。箸墓古墳と五塚原古墳は墳丘の大半が盛り土で築かれており、その造営にあたっては計画的な施工基準と高度な土木技術が採用されていたと考えられる。



五塚原古墳墳丘



五塚原古墳墳丘図



五塚原古墳墳丘イメージ★⑫



五塚原古墳墳丘 後円部から隆起斜道

6. 北山古墳

元稲荷古墳の北側、現在向日台団地が建っているあたりに、北山古墳があった。墳長 60 m 程度の前方後円墳で、向日丘陵の他の前期古墳と比べるとやや小型である。後円部に竪穴式の小石塚があり、三角縁神獣鏡のほか、鉄刀の破片などが出土した。

7. 元稲荷古墳・北山遺跡

五塚原古墳の南でいったんやせた丘陵が平野部へ張り出した先端の最高所に元稲荷古墳がある。いわゆる特殊器台型埴輪を持つ前方後方墳として著名である。墳長 94 m、後方部 3 段、前方部 2 段の段築と葺石をもつ。後方部に長さ 5.6 m の竪穴式石室があり、鉄製武器・工具類（刀剣、槍、矛、石突、刀子、錐、やりがんな、斧）、銅鏃、土師器壺が出土した。

埴輪は前方部頂の平坦面に配置されていた。特殊器台形埴輪と壺形埴輪がそれぞれ数個あり、セットで配置されていたものと想定されている。特殊器台形埴輪は都月坂型と呼ばれるもので、口縁部が受け口状を呈するが、脚部は単純な筒状をなす。体部には巴形と三角形の透かしを穿ち、これを取り囲む線刻があるが、文様は簡略化されている。壺形埴輪は複合口縁をなし、焼成前底部穿孔である。いわゆる都月型の中でも後出のものと考えたい。この埴輪配列をめぐるのは、天理市東殿塚古墳前方部裾の埴輪配列との関係が注目されている。時期的な問題を含め、検討すべき課題の多い古墳といえよう。

【注記】

特殊器台形埴輪：弥生時代後期後葉（2 世紀）に吉備地方で生まれた、華麗な文様を施し丹で赤く塗るなどして装飾性に富んだ筒型・壺型の土器。首長の埋葬祭祀に使用された。これらの特殊土器類が発達し変遷して円筒埴輪（および朝顔形埴輪）が生まれた。

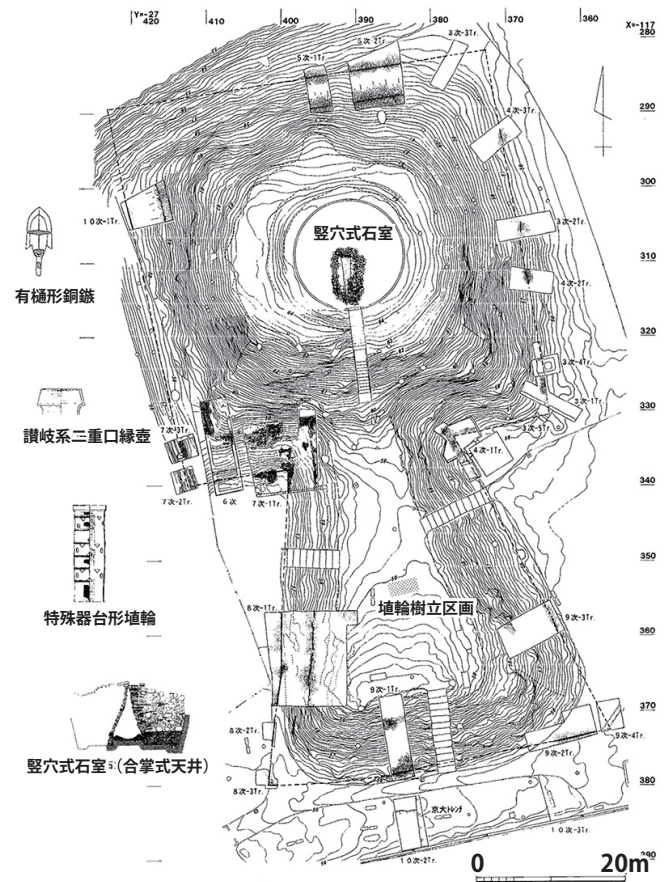
元稲荷古墳のある辺りから向日神社の社殿周辺にかけては、弥生時代の高地性集落である**北山遺跡**としても知られている。中期前葉から後期後葉の時期のものである。石器類では大型蛤刃石斧、石庖丁、石鏃他が出土している。



元稲荷古墳墳丘（前方部から後方部）



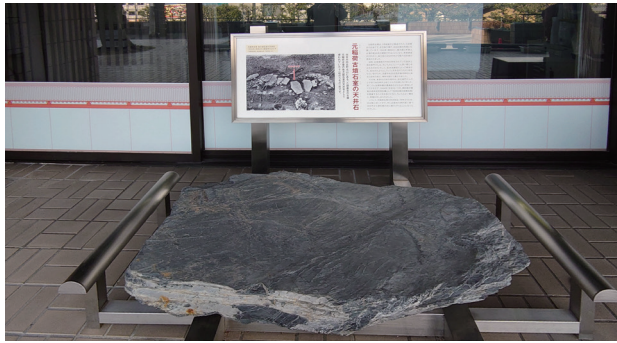
元稲荷古墳墳丘（くびれ部）



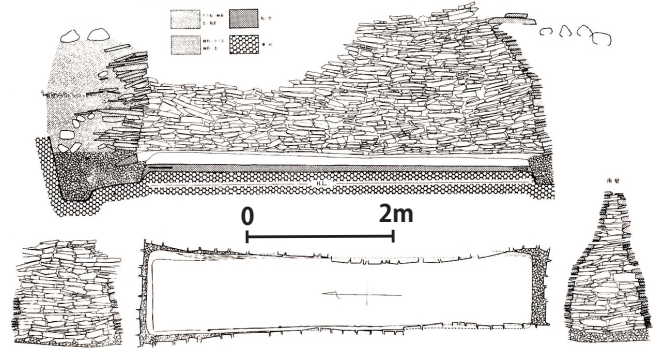
元稲荷古墳墳丘図



元稲荷古墳墳丘



元稲荷古墳蓋石 向日市文化資料館



元稲荷古墳合掌式石室

箸墓	桜井茶臼山	垂仁陵	日葉酢媛陵	仁徳陵	土師ニサンザイ
前期	前期 竪穴式石室	前期・中期	中期 竪穴式石室	中期 横穴式石室	後期

古い ← 前方後円墳の形状推移 → 新しい

むこうぎみ

〈橋梁型〉	〈向木見型〉	〈宮山型〉	〈都月型〉
倉敷・橋梁形生境石室	三次・矢谷形生境石室	柳井・宮山形生境石室	岡山・都月坂1号墳
器台形土器	特殊器台・特殊壺	弥生時代	特殊器台形埴輪 古墳時代

巨大化
特殊器台文様の付加
墳墓での使用に特化

脚部の喪失
多量配列

長岡京

延暦3年(784)から延暦13年(794)までのおよそ10年間、桓武天皇が乙訓の地で「長岡京」を営まれた。

長岡京遷都以前の乙訓地域は、桂川、小畑川、小泉川が都の中を貫流する水陸交通の至便な地で、古墳時代に秦氏が開発した灌漑用水によって発展を遂げ、奈良時代には長岡宮の場所には郡衙(役所)が置かれていた。

「続日本紀」延暦3年(784)5月16日条によると、中納言藤原小黒麻呂、同藤原種継(夫人は秦氏)、左大弁佐伯今毛人^{いまみし}らを遷都のため、山背国乙訓郡長岡村の地勢を視察させ、同年6月10日に藤原種継と佐伯今毛人が「造長岡宮使」に任命された。

同年11月11日に桓武天皇は、造営が進む中長岡宮に遷り、翌年正月には大極殿で朝賀式(元旦の儀式)を行った。

延暦4年(785)9月23日の夜、造長岡宮使の藤原種継が暗殺された。事件に大伴氏関わっていたとされ、大伴竹良らが捕えられ、既に死亡していた大伴家持が首謀者とされた。さらに、皇太弟の早良親王^{さわら}にも嫌疑がかかり、9月28日に乙訓寺に幽閉され、飲食を断ち無罪を訴えるが、十余日後に淡路島へ移送中に、淀川下流の高瀬橋付近(現在の大阪府守口市高瀬神社付近)で絶命した。遺体は淡路島に運ばれた。桓武天皇の子、安殿親王^{あて}(後の平城天皇)を立太子。

遷都からおよそ2年後の延暦5年(786)に太政官院(朝堂院)が完成し、延暦8年(789)桓武天皇は、完成した東宮(第二次内裏)に仮の内裏(天皇の住まい)西宮(第一次内裏)から移った。

延暦7年(788)から延暦9年(790)に、夫人の藤原旅子(墓は大枝中山町)、母の高野新笠(父は百済系和史氏^{やまどのふひと}、母は土師宿祢氏、墓は大枝杵掛町)、皇后の藤原乙牟漏^{おとむろ}が相次いで亡くなり、天然痘も流行し多くの死者が出た。

延暦11年(792)6月10日、安殿親王の長患いが早良親王の祟りであるとでた。

延暦11年(792)6月22日、式部省の門が激しい雷雨により倒壊し、続いて8月9日に大雨により洪水で桂川が氾濫した。

長岡京造営を断念した桓武天皇は延暦12年

(793)1月15日、大納言藤原小黒麻呂、左大弁紀古佐美、僧賢環(元興福寺の僧で鑑真から新灌頂を受ける。室生寺を創建)らを山背国葛野郡宇太村(千本丸太町、JR二条駅の北付近)に派遣し、新たな都造りのため地勢を視察させている。

廃都となった長岡京内の多くの建物は、解体され新都の平安京へと運ばれた。



乙訓寺早良親王供養塔



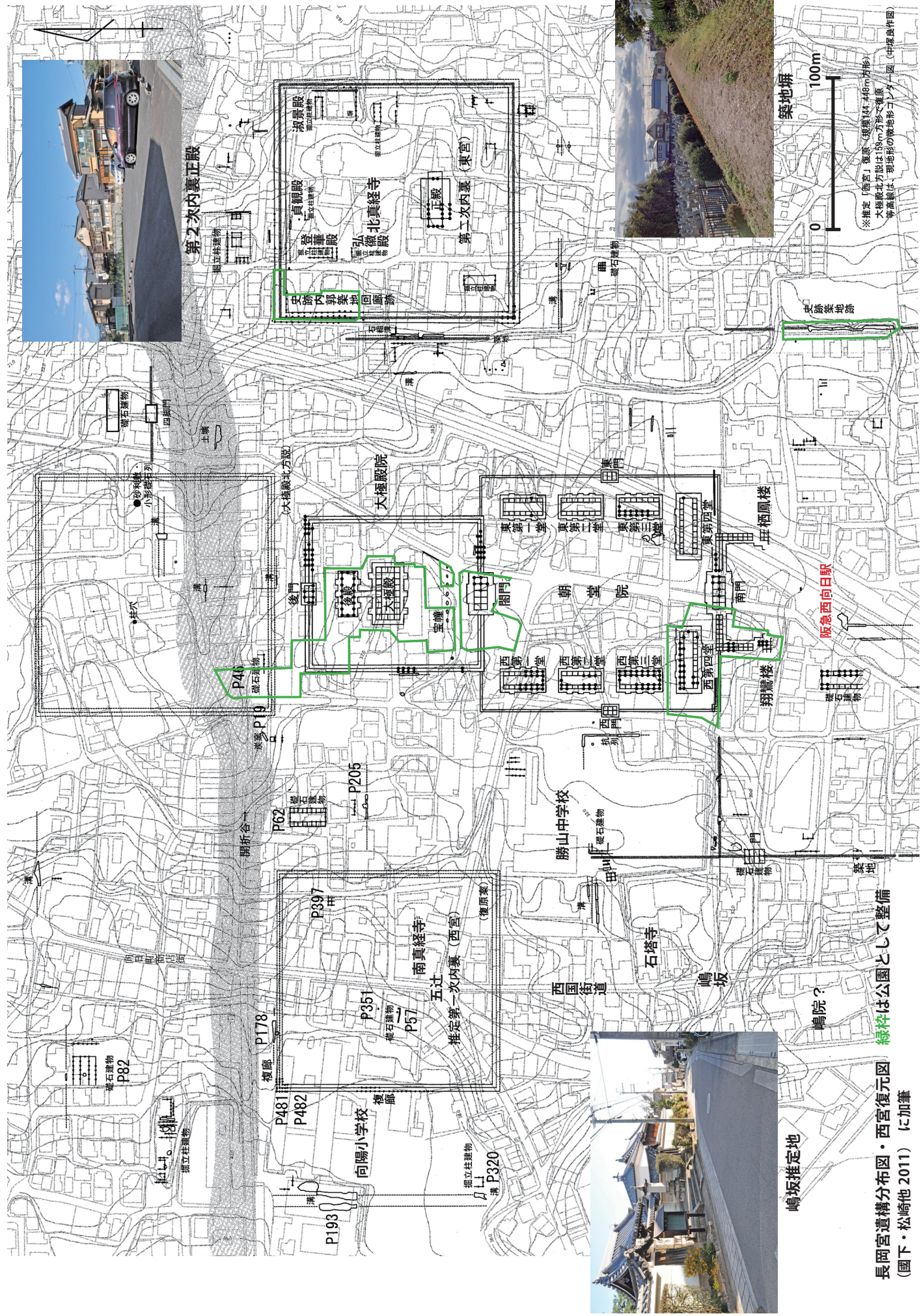
高瀬神社(京阪土居駅南東)



向陽小学校 推定第1次内裏(西宮)



北真経寺 第2次内裏(東宮) 弘徽殿跡



第二次内裏正殿



築地塀



※推定「金堂」復原（規模147.46m四方）
 大極殿北方殿は158m四方で復原
 ※高線は、地形の常地形コンター図（中略図作図）



嶋坂推定地

長岡宮遺構分布図・西宮復元図 緑枠は公園として整備
 (國下・松崎他 2011) に加筆

8. 大極殿跡・小安殿跡

向日神社の鳥居の前を、通りを渡って真っ直ぐに東へ進み、阪急京都線の近くで南へ折れると右手の住宅地の中に長岡京の大極殿跡が小安殿跡と共に整備されて大極殿公園となっている。その基壇の輪郭が、コンクリートで表示されている。

基壇の規模は東西 41.4 m、南北 21.6 m で、南面には 3 ケ所、北面 2 ケ所の階段があったことがわかっている。さらに東西の面にも 1 ケ所ずつ階段が付く可能性がある。大極殿と小安殿、そして南面中央と北面中央の門、それを結ぶ回廊で囲まれる所を大極殿院と呼ぶ。

大極殿は天皇が政務を執り、国家的儀式を行った場所である。小安殿は長岡宮で初めて設けられ、天皇の休憩所として用いられた。また、大極殿の後ろの建物を意味することから、後殿と呼ばれることもある。

大極殿北側で検出されていた回廊跡が平成 26 年に史跡追加指定されたため、回廊跡も既存の公園と一体化する形で保存整備された。回廊の痕跡(柱の跡)は朝堂院跡と同様、地表面に円形の石材を置くことで表示された。



大極殿前の宝幢



大極殿跡

東院跡

東院は、平安京遷都前の延暦 12 (793) 年正月から延暦 13 (794) 年 10 月までの間、仮の内裏となった離宮跡である。

JR 線の東側、市民温水プール建設で見つかった大規模な建物跡は当初、



東院跡 ニデック本社

「東院」とみられていたが、新幹線東側、ニデック本社建築時に、「東院」銘墨書土器、「東院内候所」木簡などが見つかり、当地が「東院」である説が有力である。



大極殿跡から小安殿跡



大極殿北側の回廊跡

9. 朝堂院・大極殿院跡

大極殿院の南にあるのが、朝堂院である。長岡宮では東西にそれぞれ4堂ずつ、計8堂の建物があつた。朝堂院の南の門である会昌門跡の位置を示す石碑が阪急西向日駅の少し北、道路の東側に立っている。また、西向日駅の西側の住宅地の中に駐車場があり、西南隅にはそこで検出された朝堂院西第三堂の説明板がある。

大極殿院や朝堂院地区から出土する瓦の94%が重圈文軒丸瓦、重圈文軒平瓦という難波宮式とよばれるものである。またその建物の規模などから、長岡宮の大極殿院や朝堂院などが後期難波宮のものを解体・移築したものであると考えられている。

朝堂院は、宮の中心にある国家の政務や儀式を行う場所である。朝堂院は南北に長く、長方形と正方形を重ねた形をしている。北側の区画を大極殿院、南側の区画を朝堂院と呼ぶ。現在、朝堂院公園として整備されているのは西側南端の堂にあたる朝堂院西第四堂と朝堂院の南門、回廊、楼閣である。

朝堂院西第四堂は発掘調査で階段の痕跡が検出されたため、当初壇上積みによる復原が検討されていたが、階段の位置・規模が明確でないため、基壇の位置をコンクリート縁石で示し、縁石を土留めとして盛土を行うという方法で保存整備された。

南門や回廊では、遺構上を碎石と真砂で舗装し、礎石位置に円形の花崗岩を置くことで、遺構を平面的に示す。

楼閣では礎石位置を花崗岩の円柱で示すことで、立体的な遺構の表示が行われた。楼閣跡は朝堂院正面の南門に付属する形で検出されているが、都城遺跡としての検出は初例であり、重要な遺構であることから、南門、回廊跡との遺構の違いや重要性を示すために立体的に表示されている。



南門（会昌門）跡碑



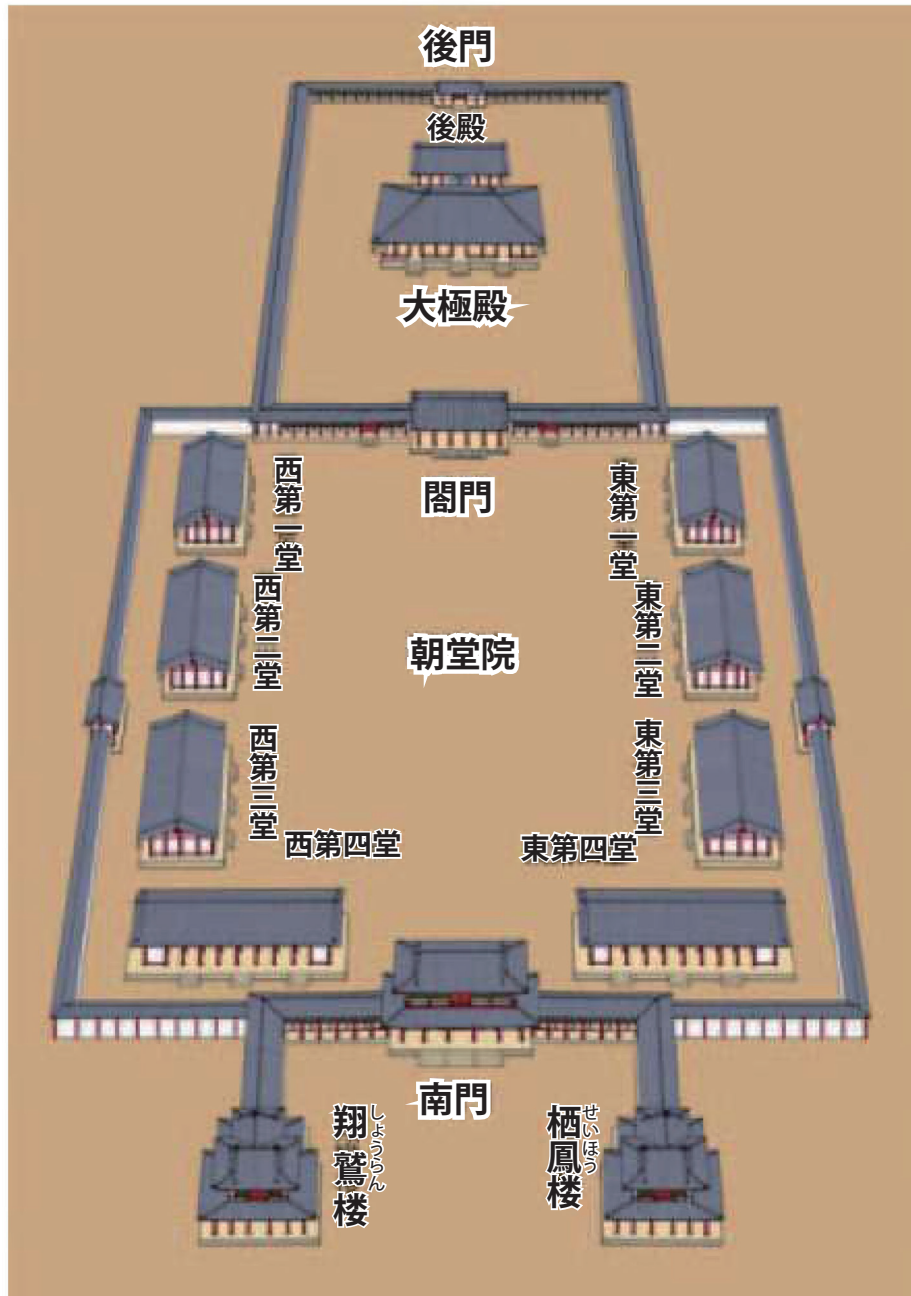
南門柱跡 道路反対側に碑



回廊柱（手前）と翔鸞楼柱跡（奥）



西第四堂跡



朝堂院復元図